

Study on How Views of being shaped in
Fundamental Education Change in Image before
and after Nursing Practice II

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 真美, 鶴田, 晴美, 中村, 昌子, 熊谷, 玲子, 吉岡, 栄子, 大澤, 久美枝, 奥井, 鈴江, HASEGAWA, Naomi, TSURUTA, Haremi, NAKAMURA, Masako, KUMAGAI, Reiko, YOSHIOKA, Eiko, OSAWA, Kumie, OKUI, Suzue メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000045

【研究報告】

看護基礎教育における看護観形成に関する研究 －基礎看護学実習Ⅱ前後の看護イメージの変化－

Study on How Views of being shaped in Fundamental Education
Change in Image before and after Nursing Practice II

長谷川真美 鶴田 晴美 中村 昌子 熊谷 玲子
吉岡 栄子 大澤久美枝 奥井 鈴江

Naomi HASEGAWA Haremi TSURUTA Masako NAKAMURA Reiko KUMAGAI
Eiko YOSHIOKA Kumie OSAWA Suzue OKUI

要 旨

看護学生の看護観形成に関連する看護に対するイメージ（看護イメージ）の変化を継続的にとらえる試みの第3段階として、基礎看護学実習Ⅱ前後の変化を検討した。

結果、学生の看護イメージは、総反応語数においては大きな変化はなかったが、カテゴリー別反応語とその内容においては変化が確認された。実習後では、「看護〈行為〉」「人間」「看護〈状況把握〉」「看護〈行為の結果〉」「看護〈チーム〉」のカテゴリーの割合が増加した。増加した反応語の傾向から、患者の情報を収集し、アセスメント、看護目標設定、具体的計画立案、実施評価するという看護過程の経験が意識化され、その結果、反応語の増加がもたらされたと考えられた。また、少数ではあるが自己の適性を否定する反応語があげられ、職業社会化の観点から、やりがいや看護を動機付ける体験を工夫する必要性が示唆された。

キーワード：看護観、看護イメージ、基礎看護学実習Ⅱ

I. 緒言

看護基礎教育は、看護師として適切な知識技術態度を修得するとともに、態度の育成に職業的価値観である看護観を育成する場である。看護観は「それぞれの看護者が行う看護として表現され、個人の中に取り入れられた看護における価値観、規範、態度、行動を内面化し、個人の中で価値付けられたものである。すなわち、看護の学習や体験を通じて形成された価値観」といえる。

価値観について、文部科学省中央教育審議会キャリア教育職業教育特別部会答申では、生涯学習者としての重要な要素として意欲態度があり、意欲態度の重要な要素として価値観を挙げている。また、価値観と意欲

や態度の関係を「価値観は人生観や社会観、倫理観等、個人の内面にあって価値判断の基準になるものであり、価値を認めて何かをしようと思ひ、それを行動に移す際に意欲や態度として具現化するという関係」と説明している。

ところで、職業教育においては、職業社会化という概念がある。職業社会化とは、その職業における価値や規範、態度や行動様式を受け入れ内面化しながら、その職業に特有の知識や技術を修得し、自己概念を変容させながら職業アイデンティティを形成していく過程である¹⁾。看護観は職業社会化によって形成された価値観といえることができる。

看護教育において、患者に直接看護を提供する臨床実習は、体験による知識の確認や内面化を目的としており、職業社会化にとって欠かせないものである。したがって、

東都医療大学ヒューマンケア学部看護学科

看護観については実習の中での気づきやレポートなど学生の経験を分析することで看護観を捉えようとする研究^{2) 3) 4) 5) 6)}、4年間の看護についてのイメージや認識を捉えようとする研究^{7) 8) 9)}など、多くの研究者が、教育の過程を通して分析、研究を進めている。

筆者ら^{10) 11) 12)}は、これまで、看護理論を用いた教育の成果および病院の機能、看護の機能の理解を主目的とした実習の成果について検討してきた。今回は、看護教育を受けることを選択した学生が、患者に直接看護を提供する最初の体験である臨床実習において看護の価値の内在化を検討することで、職業社会化のプロセスの一端を捉えたいと考えた。

糸山¹³⁾は、学習によるスキーマの変化を検討することで個人の中で概念化された知識を評価できる方法として連想法を提唱している。筆者らは、前述したように、平成24年度、看護基礎教育初期の学生の看護に対するイメージ(以下看護イメージ)の変化について連想法を用いて調査し、文献(ナイチンゲールの「看護覚え書」)を用いた学習が、看護イメージの広がりや深まりに効果があることを確認した¹¹⁾。さらに平成25年度の分析で、基礎看護学実習I前後の看護イメージの変化について検討し、わずかではあるがイメージの広がりや深まりがあることを確認した¹²⁾。

本研究の最終目的は、4年間の教育の中で「看護観」がどのように培われるのか、形成のプロセスをとらえることであるが、そのための一手段として、学生の看護イメージが、カリキュラムの進行やその後の教育的かかわりによって変化しているのか、また、卒業時までどのように変化するのを見極め、今後のカリキュラムの組み方や教育内容に反映させるための示唆を得たいと考えている。今回は、基礎看護学実習Iの次の節目であり、学生が患者に直接看護を提供する最初の臨床実習体験である基礎看護学実習IIに焦点を当て、これまでと同様に連想法を用いて看護イメージを捉え、変化の分析を行うこととした。

基礎看護学実習IIは、2年次後期終了時に実施され、はじめて患者を受け持ち、看護の基本的考え方である看護過程を展開しながら、系統的に援助を行う臨床実習である。この体験は、学生が看護実践者として自分の適性を見極めながら、看護イメージを具体化させる機会であり、価値の内在化の表現である看護イメージの変化が期待される。

職業教育において適性、かつ職業アイデンティティの確立につながる職業的価値観を育成することは重要であ

る。本研究の意義は、いわゆる職業社会化プロセスの現状を明らかにすることで、その獲得プロセスが明らかとなり、教育的働きかけの内容とタイミングを考えるための資料提供となることである。

II. 研究の目的

本研究は看護師を志す学生がどのように「看護」に対するイメージを変化させて自己の看護観を形作っていくのかを時間軸でその変化を捉え、看護観育成に向けた効果的なカリキュラム配置や教育方法を検討するものである。これまでに第1段階として1年次前期終了時、第2段階として1年次後期終了時の看護イメージを明らかにしてきた。今回は第3段階として、2年次後期に行われ、はじめて患者を受け持ち看護過程の展開を行う基礎看護実習IIを経験した学生が自分の看護イメージをどのように変化させたのかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質問紙法による量的記述的研究デザイン

2. 対象

対象は、A大学ヒューマンケア学部看護学科2012年入学生(2年次生)94人。

3. 調査期間・場所

2014年2月～3月。調査場所はA大学教室内。

4. データ収集

1) 調査内容

基礎看護学実習II(2年後期)開始前および終了後の看護のイメージ

2) 調査方法

基礎看護学実習IIオリエンテーション時(開始前)、およびまとめの学習終了後(終了時)に連想法¹³⁾を用いて看護イメージを調査した。調査は無記名とし、調査にあたっては、該当学生全員に、研究目的および倫理的配慮について説明し、調査への協力を依頼した。協力の意思が確認できた学生を対象に、記入方法の説明2分、連想時間50秒をとった。学生には、連想時間にイメージした反応語をそのまま調査票に記入し、続いて設定した記入時間に連想した理由を記入してもらった。回収は、

教室内に回収箱を設置し、調査者退出後投函してもらった。

開始前は平成26年2月、終了後は平成26年3月に実施した。

5. 連想法とは

連想法は、糸山¹³⁾によって授業評価の1方法として開発された学習評価法である。学習によるスキーマ(知識、概念、イメージなどの総称)の変化を検討することで、個人の中で概念化された知識を評価できる方法である。連想法は知識、概念、イメージなどの総称であるスキーマに対応し、学習によるスキーマの変化を検討することで個人の中で概念化された知識を評価できる方法として注目される。

具体的方法は、刺激語に対して30～50秒程度の連想時間を取り、連想した言葉およびその理由を記述してもらうことにより、スキーマの広がりや深まりを検討するものである。

用語の定義

1) 看護観

それぞれの看護者が行う看護として表現され、個人の中に取り入れられた看護における価値観、規範、態度、行動を内面化し、個人の中で価値付けられたものである。すなわち、看護の学習や体験を通じて形成された価値観である。

2) 看護イメージ

看護に対するイメージであり、個人が看護をどのように捉えているかを示す。イメージは個人の中で概念化された知識であり、学習や体験によって変化する。

6. データ分析

分析はエクセルを用いて量的分析を行い、「看護」を刺激語とする反応語の広がりや深まりの観点から結果を吟味し、教育的示唆を検討した。反応語の分類にあたっては、研究者間での一致を確認し妥当性を確保した。

また、反応語の分類には、2012年および2013年調査と同様、辻⁹⁾のカテゴリーを用い、反応語のカテゴリーを「人間」「環境」「健康」「看護<知識>」「看護<状況の把握>」「看護<行為>」「看護<行為の結果>」「看護<チーム>」「看護<心理>」とし、どのカテゴリーにも属さないものを「その他」として、10カテゴリーの分類とした。この分類は、看護の基本概念である「人間」「環境」「健康」「看護」を基本とし、イメージされる内容が

多いと予測される「看護」について、〈 〉で示される要素の分類を付加したものである。反応語の分類は、研究者間で一致を確認した。

7. 倫理的配慮

本研究は、東都医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号H2607)。

具体的な倫理的配慮として、以下の配慮を行った。

参加は任意であり、協力しなかった時にも、不利益がないこと、途中での参加の取りやめが可能であることを保証する。データはプライバシー保護のため、無記名とし、分析に当たっては個人を特定する分析は行わず、統計的に処理して個人が特定できる分析を行わないことを保証した。

また、データは外部記憶装置に保存し、保管は研究室内の鍵付きキャビネットで行った。

発表に際しては、調査対象者が所属する地域及び施設が特定されないよう匿名(記号を使って表現)とすること、および、データは本研究以外には使用せず、研究終了後に破棄することとした。

研究への参加の同意は、調査開始前に文書及び口頭で研究の趣旨及び参加の任意性、倫理的配慮について説明し、調査用紙の回収をもって同意と判断した。

調査に際しては、学生の不利益として、調査回数が多いこと、調査への協力や記述内容が成績に反映するとの誤解を受ける可能性があることを配慮し、成績への影響がないことおよび研究意図を、対象者へ調査ごとに十分に説明した。

また、調査用紙の回収は、教室内に回収箱を設置し、教員退出後、本人が直接投函する形式をとり、教員が直接研究参加を確認できないよう配慮した。

8. A大学の基礎看護学実習

1) 位置づけ

「看護専門職を志す学生が、大学での広範囲な分野の理論的知識に加え、看護学の専門的知識・技術を看護の実践を通して統合する機会」と位置づけられるA大学の臨床実習の中で、基礎看護学実習は、臨床実習の最初の段階として位置づけられている。基礎看護学実習Ⅱは、2年次後期(2月～3月)に実施される。1年次後期(2月)に実施した「看護の実施される環境の理解、看護の役割理解」に主眼を置いた基礎看護学実習Ⅰ(1単位)とは約1年の間隔がある。

学生が基礎看護学実習Ⅱを体験する前に、基礎分野

の必修および選択科目、専門基礎分野のすべての科目、専門分野では看護の基礎に含まれる基礎看護学領域担当の科目、成人看護学総論、成人看護慢性期援助論、小児看護学総論、母性看護学総論、公衆衛生看護学概論、公衆衛生看護活動論を修了している。

2) 目的・目標

基礎看護学実習の目的は、「看護の対象が健康上の問題を持ちながらどのように日常生活を過ごしているのか理解を深め、看護が担う役割と責任について学ぶ」であり、基礎看護学実習Ⅱの目的、目標は以下のとおりである。

<目的>

健康障害をもつ患者の日常生活環境としての療養環境を的確にとらえ、看護過程を展開し、学習した基本的な生活援助策を実施することによって基礎的な看護能力を習得する。

<目標>

1. 患者の状態を把握し、援助が必要な日常生活援助をアセスメントできる。
 - 1) 患者の人となりや療養生活について資料を作成して説明できる。
 - 2) 患者の入院生活を妨げている看護問題を説明できる。
2. 患者に必要な看護が計画・実施・評価できる。
 - 1) 優先度の高い日常生活上の看護問題について看護計画を立てることができる。
 - 2) 計画した看護援助を安全・安楽に患者に実施できる。
 - 3) 実施した看護援助やそれによる患者の変化を具体的に記述することができる。
 - 4) 日々の看護記録と立案した計画を照らし合わせて内容の評価と修正が記述できる。
3. 看護の役割とは何か自分の言葉で説明できる。
 - 1) 看護の役割と機能が説明できる。
4. 看護学生としてふさわしい態度で実習できる。
 - 1) 看護学生としてふさわしい学習姿勢がとれる。
 - 2) 患者の尊厳を守ることができる。
5. 看護学生としての自己の課題を明確にできる。
 - 1) 実習をとおして、看護師を目指している自らの課題が説明できる。
 - 2) 課題解決に必要な行動が説明できる。

<実習方法>

1名の学生が成人期または老年期の患者を1名受け持ち、日常生活援助を中心に、看護師・指導教員の指導を受けて、看護過程を展開する。

IV. 結果

協力が得られたのは、実習開始前94人(回収率93.1%)、終了後95人(回収率94.1%)であった。

結果の記述において、「 」はカテゴリ、『 』は反応語を示す。

1. 実習開始前の反応語 (表1 表2)

実習開始前の反応語は、1語2人、2語9人、3語14人、4語20人、5語27人、6語22人、1人当たりの平均反応語数は4.35語であった。

総反応語数は409語、反応語種数172語であった。分類に沿ってみると、「人間」反応語数67語、反応語種数14語、「環境」反応語数20語、反応語種数8語、「健康」反応語数17語、反応語種数15語、「看護<知識>」反応語数71語、反応語種数19語、「看護<状況の把握>」反応語数37語、反応語種数15語、「看護<行為>」反応語数101語、反応語種数38語、「看護<行為の結果>」反応語数5語、反応語種数5語、「看護<チーム>」反応語数5語、反応語種数4語、「看護<心理>」反応語数60語、反応語種数22語、「その他」反応語数26語、反応語種数21語であった。

最も多かった反応語は『患者』27人、次いで『技術』21人、『ケアプラン』19人、『コミュニケーション』16人、『知識』14人、『ナイチンゲール』10人であった。

2. 実習終了後の反応語 (表1 表2)

実習終了後の反応語は、1語2人、2語6人、3語13人、4語24人、5語25人、6語25人で、1人当たりの平均反応語数は4.46語であった。

総反応語数は424語、反応語種数176語であった。分類に沿ってみると、「人間」反応語数79語、反応語種数26語、「環境」反応語数10語、反応語種数7語、「健康」反応語数8語、反応語種数8語、「看護<知識>」反応語数44語、反応語種数15語、「看護<状況の把握>」反応語数55語、反応語種数21語、「看護<行為>」反応語数136語、反応語種数49語、「看護<行為の結果>」反応語数12語、反応語種数7語、「看護<チーム>」反応語数13語、反応語種数5語、「看護<心理>」反

応語数 46 語, 反応語種数 18 語, 「その他」 反応語数 21 語, 反応語種数 20 語であった。

最も多かった反応語は『患者』 23 人, 次いで『コミュニケーション』 23 人, 『観察』 20 人, 『観察力』 14 人, 『個別性』 12 人, 『ケア』 12 人, 『思いやり』 12 人, 『援助』 11 人, 『アセスメント』 10 人であった。

3. 実習前後の反応語の変化

「人間」では, 『患者』『看護師』など 10 反応語が実習前後ともに存在した。5 人以上の増加があった反応語は『信頼関係』であった。実習後は『小児』『医療従事者』『成人』『母性』など 14 反応語が消失し, 『個別性』『責任』『QOL』, 『患者さんのため』『気もち』など 16 反応語が新たに加わった。

「環境」は, 実習前後ともに存在したのは『病院』『環境』『在宅』『家』の 4 反応語であった。5 人以上の減少があった反応語は『病院』であった。実習後は, 『自宅』『ベッド』『臨床別』『ICU』の 4 反応語が消失し, 『地域』『入院』『病棟』の 3 反応語が加わった。

「健康」は, 『急性期』『慢性期』『セルフケア』『不安』の 4 反応語が実習前後ともに存在したが, 5 人以上の増減があった反応語はなかった。実習後は, 『命』『疾病』『死』など 11 反応語が消失し, 『苦痛』『終末期』『生命』『病気』の 4 反応語が加わった。

「看護<知識>」は, 『技術』『知識』『ナイチンゲール』『観察力』『コミュニケーション力』『ゴードン』『基礎』の 7 反応語が実習前後ともに存在した。実習後には, 『技術』『知識』の 2 反応語は 5 人以上の増加があった。『学ぶ』『考える』『勉強』の 3 反応語が消失し, 『保助看法』『理解力』『説明能力』など 6 反応語が加わった。

「看護<状況の把握>」は, 実習前後ともに存在したのは『アセスメント』のみで, 前後ともに 1 人であった。実習後に『判断』『判断力』『根拠』『臨機応変』の 4 反応語が加わった。

「看護<行為>」は, 『コミュニケーション』『ケア』『援助』『観察』など 13 反応語が実習前後ともに上げられた。実習後には, 『コミュニケーション』が 5 人以上の増加を見た。『助ける』『ボディメカニクス』『生活の援助』など 17 反応語が消失し, 『療養上の世話』『診療の補助』『支え』など 14 反応語が加わった。

「看護<行為の結果>」は, 『安全』『安楽』『感謝』の 3 反応語が実習前後ともに存在したが, 実習後の 5 人以上の増減はなかった。『安心』『癒やし』など 5 項目が消失し, 『安らぎ』のみが追加された。

「看護<チーム>」は, 前後に共通するのは『チーム』『チームワーク』『チーム医療』など 5 反応語で, 5 人以上の増減はなかった。実習後に消失したのは『つながり』のみで, 『カンファレンス』『協調性』『共有』が加わった。

「看護<心理>」は, 『おもいやり』『優しい』『笑顔』など 5 反応語が共通して存在した。実習前後で 5 人以上の増減はなかった。『気づかい』『温かさ』など 10 反応語が消失し, 『気配り』『親切』など 6 反応語が加わった。

「その他」では, 実習前後ともに『清潔』『ナース服』『実習』など 6 反応語が上げられたが, 実習前後の 5 人以上の増減はなかった。『将来』『薄給』など 5 反応語が消失し, 『仕事』『経験』『泣きたくなる』『勉強がたかさん』など 7 反応語が加わった。

表 1. カテゴリー別反応語総数, 第 1 反応語

カテゴリー	基礎看護実習Ⅱ開始前(2月)n=94				基礎看護実習Ⅱ終了後(3月)n=95				(参考)基礎看護実習Ⅰ終了後(3月)n=102			
	総反応語数	1人あたりの反応語数	反応語種数	第1反応語	総反応語数	1人あたりの反応語数	反応語種数	第1反応語	総反応語数	1人あたりの反応語数	反応語種数	第1反応語
人間	6.7(16.4)	0.71	25	14(14.9)	79(18.6)	0.83	26	27(28.4)	89(19.4)	0.87	23	27(26.5)
環境	20(4.9)	0.21	8	6(6.4)	10(2.3)	0.11	7	3(3.1)	24(5.2)	0.24	8	9(8.8)
健康	17(4.2)	0.18	15	3(3.2)	8(1.9)	0.08	8	3(3.1)	26(5.7)	0.25	11	3(2.9)
看護<知識>	71(17.4)	0.76	19	19(20.2)	44(10.4)	0.46	15	13(13.7)	58(12.7)	0.57	10	12(11.8)
看護<状況の把握>	37(9.0)	0.39	15	7(7.4)	55(13.0)	0.58	21	7(7.4)	7(1.5)	0.07	5	3(2.9)
看護<行為>	101(24.7)	1.07	38	29(30.9)	136(32.1)	1.43	49	29(30.5)	132(28.8)	1.29	30	32(31.4)
看護<行為の結果>	5(1.2)	0.05	5	0	12(2.8)	0.13	7	1(1.1)	9(2.0)	0.09	4	0
看護<チーム>	60(14.7)	0.05	4	0	13(3.1)	0.14	5	2(2.1)	23(5.0)	0.23	8	0
看護<心理>	26(6.3)	0.64	22	7(7.4)	46(10.8)	0.47	18	5(5.3)	64(14.0)	0.63	11	13(12.7)
その他	26(6.3)	0.28	21	9(9.6)	21(5.0)	0.22	20	5(5.3)	26(5.7)	0.25	13	3(2.9)
合計	409(100.0)	4.35	172	94(100.0)	424(100.0)	4.46	175	95(100.0)	458(100.0)	4.49	123	102(100.0)

注) () 内は縦列の総計に対する割合

表2. 基礎看護学実習Ⅱ前後の反応語の種類と反応語数

カテゴリ	反応語	反応語数		(参考)	
		基礎実習Ⅱ 開始前	終了後	基礎実習Ⅰ 終了後	
人間	患者	27	23	30	
	看護師	5	5	10	
	人	4	1	7	
	医師	3	1	6	
	小児	3			
	医療従事者	2			
	高齢者	2	1		
	信頼関係	2	8	3	
	成人	2			
	母性	2			
	医療者	1			
	学生	1	1	1	
	家族	1	2	6	
	患者の心理	1			
	患者家族	1			
	女優	1			
	信頼	1	1	1	
	生活	1	2		
	立役者	1			
	近い	1		1	
	遠い	1			
	人間関係	1		1	
	人の事ばかり気にする	1			
	人を元気づけられる	1			
	老年	1			
	1対複数		1		
	GOL		2		
	患者さんのため		2		
	患者さん優先		1		
	患者主体		1		
	気持ち		2		
	個別性		12		
	助手		1		
	責任		5	8	
	責任感		1		
	ニーズ		1		
	人間性		1	2	
	部長		1		
	プライバシー		1		
	ふれあい		1		
	リーダー		1		
	准看護師			2	
	師長		1		
	助産師		2		
	保健師		1		
母親		1			
尊敬		1			
まるごと		1			
一生		1			
人種		1			
守秘義務		1			
人を愛する心		1			
小計	67	79	89		
環境	病院	9	2	16	
	在宅	4	1	2	
	環境	2	3		
	家	1	1		
	自宅	1			
	ベッド	1		1	
	臨床別	1			
	ICU	1			
	地域	1			
	入院	1			
	病棟	1	1		
	外来	1			
	臨床	1			
	1日	1			
	福祉	1		1	
	小計	20	10	24	
	健康	命	2		
		疾病	2		
		急性	1		
		急性期	1	1	
死		1			
循環		1			
食生活		1			
セルフケア		1	1		
体力		1		1	
不安		1	1		
保健		1			
慢性		1			
慢性期		1	1		
病		1			
抑うつ		1			
苦痛			1	1	
終末期			1		
生命			1	6	
病氣			1	3	
生と死			1		
生きる			1		
ヘルスケア			1		
衛生			1		
重労働			1		
小計		17	8	16	
看護(知識)	技術	21	14	18	
	知識	14	7	14	
	ナイチンゲール	10	4	16	
	国家資格	4		3	
	コミュニケーション能力	3	1		
	勉強	3			
	課題	2			
	ゴードン	2	1		
	専門的	2			
	学習	1			
	観察力	1	6		
	基礎	1	1		
	教育	1			
	対人関係技術	1			
	テスト	1		1	
	廃用症候群	1			
	小計	71	44	58	
	看護(知識)つき	プロ	1		1
		法律	1		2
		医学	1		
		解剖生理		1	
		関連図		2	
		看護の知識		1	
		技術力		1	
		経験		2	1
コミュニケーション力			1		
学び			1		
分かる			1		
理解力				1	
説明能力				1	
小計		71	44	58	
看護(状況把握)		アセスメント	12	10	1
		看護過程	5	2	
		看護計画	3	5	
		情報収集	3	7	
		過程	2		
		看護診断	2		1
		評価	2	3	
		科学的根拠	1		
		根拠	1	7	1
		情報	1	2	
		診断	1		
	判断能力	1	3	2	
	分析	1			
	目標	1			
	予測	1			
	裏付け		2		
	応用		2		
	看護問題		2		
	根拠のあるケア		1		
	実践性		1		
	対応力		1		
	把握		1		
	判断		1		
	見極め		1		
	優先順位		1		
臨機応変		1	2		
カルテ		1			
小計	37	55	7		
看護(行為)	ケア	19	12	21	
	コミュニケーション	16	23	27	
	援助	9	11	8	
	観察	7	20	7	
	清潔	6	4	8	
	医療	4	2	4	
	傾聴	3	1		
	介護	2		1	
	支える	2	1		
	時間・時間厳守	2	1		
	注射	2		4	
	治療	2	1		
	観る	2			
	挨拶	1			
	環境整理	1			
	管理	1		2	
	気付き	1	3	1	
	血圧・血圧測定	1	1		
	健康教育	1			
	採血	1			
	支え	1		6	
	支援	1			
	実施	1	3		
	指導	1	1		
	身体的援助	1		1	
スクリーン・リフト	1				
薬学・薬学	1	1	5		
精神的援助・精神科	1	1			
世話	1	1			
全身清拭	1				
誤嚥防止サポート	1				
助け	1		1		
タッチング	1				
手伝い	1				
日常生活の援助	1	1			
ベッドメイキング	1		1		
訪問	1				
訪問看護	1				
介助		1			
確認		1			
考える		3			
看護記録		3			
観察項目		1			
患者さんとの関わり		1			
感染防止・予防		2			
気づく		2			
工夫		1			
ケアプラン		1			
心のケア		2			
心の支え		2			
声かけ		1			
言葉		1			
サポート		1			
準備		1			
心身のケア		1			
正確		1			
生活援助		1			
積極的		1			
対話		1			
バイタルサイン		2	4		
不安の緩和		1			
触れる		1			
報告		1			
守る		1			
見つめる		1			
見守る・見守り		8			
向き合う		1			
小計	19	12	21		
看護(行為)の結果	命を救う	1			
	回復の促進	1			
	貢献	1			
	治療	1			
	安全安楽	1	2		
	安心		2		
	安全		3	4	
	安楽		2	3	
	癒し		1		
	質		1		
	変化		1		
	感謝			1	
	安らぎ			1	
	小計	5	12	9	
	看護(チーム)	チーム	2	4	6
		チーム医療	1		7
		チーム連携	1		
		連携	1	4	4
		カンファレンス	1	1	1
		協力		3	2
		チームワーク		1	1
		協調性			1
		共有			1
		小計	5	13	23
		看護(心理)	思いやり	9	12
大変			7	3	8
辛い			5	1	2
忙しい			4	3	5
疲しい			4	3	
気遣い			3		
難しい			3	4	
優しい			3	1	14
やりがい			3	1	
笑顔			2	7	7
親切			2		1
しんどい			2	1	
精神			2		
尊敬			2	1	
温かい			1		
きつい	1			1	
厳しい	1		1	1	
心	1		2		
ストレス	1				
誠実	1				
強い	1			1	
丁寧	1				
適応力	1		1		
気配り	1		2	2	
自尊心	1				
誠意	1				
喜び	1				
頼れる	1		1		
忍耐	1		1		
小計	60	46	64		
その他	実習	4	1	3	
	やめたい	2	1		
	白衣	2		3	
	記録が多い	1			
	記録物	1			
	きれいな	1			
	胃が痛い	1			
	選択ミス	1			
	大学	1			
	逃げたい	1			
	走る	1			
	果てしない	1			
	身だしなみ	1		1	
	未知	1			
	向いてない	1			
	仕事	1		1	
	楽しくない	1	1		
	つまらない	1	1		
	睡眠不足・徹夜	1	1		
	白い	1	1	3	
	努力	1	1	1	
	行動力	1			
	固定的	1			
	主体的	1			
	順応性	1			
切り替え	1				
楽しい	1		2		
やりたくない	1				
焦り	1				
多岐	1				
疲れる	1				
反省	1				
夜勤	1				
やってみること	1		1		
演習	1		1		
マスク	1		1		
光	1		1		
厳しい現実	1		1		
泣きたくなる	1		1		
勉強がたかさん	1		1		
小計	26	21	18		
合計	409	424	442		

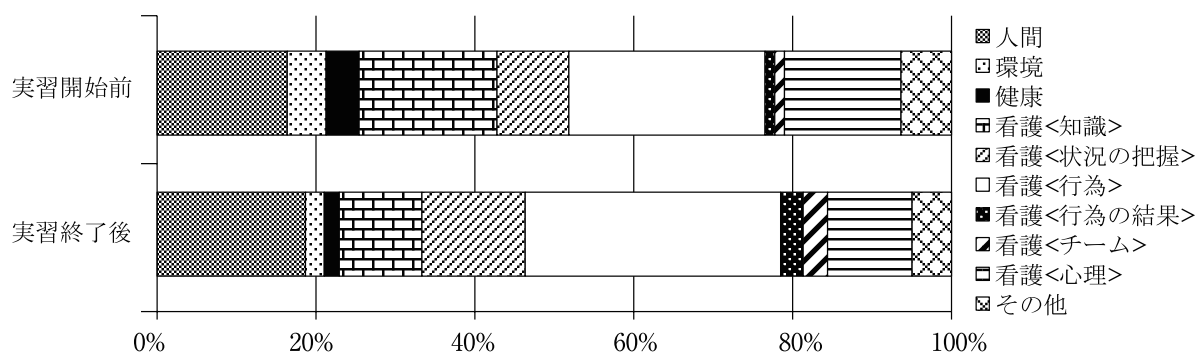


図1. 基礎看護学実習Ⅱ前後の反応語のカテゴリー別割合

V. 考察

1. 基礎看護実習Ⅱ前後の反応語の変化について

1) 総反応語数の変化

総反応語数は実習開始前 409 語、実習終了後 424 語で、若干の増加があった。開始前の総反応語数が最も多かったのは、「看護<行為>」24.7%、次いで「看護<知識>」17.4%、「人間」16.7%、「看護<心理>」14.7%、「看護<状況把握>」9.0%、「その他」6.3%、「環境」4.9%、「健康」4.2%、「看護<行為の結果>」1.2%、「看護<チーム>」1.2%の順であった。終了後で最も多かったのは、「看護<行為>」32.1%で開始前と同様であったが、次に多かったのは、「人間」18.6%、「看護<状況把握>」13.0%、「看護<心理>」10.8%、「看護<知識>」10.4%、「その他」5.0%、「看護<チーム>」3.1%、「看護<行為の結果>」2.8%、「環境」1.9%、「健康」1.9%の順となった(図1)。終了後に割合が増加したのは、「看護<行為>」「人間」「看護<状況把握>」「看護<行為の結果>」「看護<チーム>」であった。これらのカテゴリーは、看護実践に直結する反応語を含んでいる。特に、「看護<状況把握>」「看護<行為の結果>」は、患者の情報を収集し、アセスメント、看護目標設定、具体的計画立案、実施評価するという看護過程の経験が意識化され、その結果、反応語の増加がもたらされたと考えられる。

2) 反応語の変化

さらに、反応語の内容を見ると、実習開始前、実習終了後ともに「患者」が最も多かった。次に多かった反応語は、実習開始前では「技術」「知識」「ケアプラン」など知識に関する反応語であった。実習終了後は「観察」「ケア」「思いやり」など実習開始時とは異なった反応語であり、具体的な看護ケアに対応した反応語であった。

また、実習開始前、終了後の両方に存在した反応語

は 75 語であり、終了後には 100 語、全体の 57.1%が新たに加わったことになる。増加の割合が最も多いカテゴリーは、「看護<行為の結果>」で、7 反応語中 6 語(85.7%)、次いで「その他」20 反応語中 13 語(65.0%)、「看護<行為>」49 反応語中 31 語(63.3%)、「看護<状況把握>」21 反応語中 13 語(61.9%)、「人間」26 反応語中 16 語(61.5%)、「看護<チーム>」5 反応語中 3 語(60.0%)、「看護<知識>」15 反応語中 8 語(53.3%)、「健康」8 反応語中 4 語(50.0%)、「環境」7 反応語中 3 語(42.9%)、「看護<心理>」18 反応語中 4 語(22.2%)の順であった。

カテゴリー別に詳細をみると、「看護<行為の結果>」では、『安心』『安全』『癒し』『変化』などの反応語があげられ、これらは看護を行ったことにより、患者にもたらされた成果をとらえ、意識できた結果であると考えられる。

「看護<行為>」では、『見守る・見守り』『考える』『気づく』『心のケア』『心の支え』『寄り添う』などの患者のニーズをしっかりと見極め、患者の心に寄り添うことを嗜好する反応語が増加している。これは、実際の患者に接し、そのニーズ把握に忠実に向き合った結果、患者のニーズをしっかりと見極め、患者の心に寄り添うことの必要性や重要性に気付いた結果と考えられる。

「看護<状況把握>」では、『裏付け』『応用』『看護問題』『根拠あるケア』などがあげられ、看護を実践するにあたり、根拠を持ったケアを実践する必要性を認識できた結果であると考えられる。

「人間」では、『患者優先』『個別性』『責任』など対象を尊重する意識と、看護者である自分が負うべき責任が意識化された結果と考えられる。これらの変化は、実際に看護を実践する際には患者が存在し、患者の状況に合わせて対処することの大切さと、看護を提供する者としての責任をもってケアすることの必要性を学んだ結果と理解できる。また、反応語が増加したのは、具体的な

イメージとして看護が構成されたためと考えられる。

河相ら¹⁴⁾は、基礎看護学実習で看護過程を展開した学生の学びとして、【個性のある援助計画が立案できる】【患者の状態を正確に把握する】【潜在的な問題が分かる】【手際の良いバイタルサインの測定技術と観察】【患者との円滑なコミュニケーション】【基礎となる生行動援助技術と応用できる技術】【患者と真剣に向き合う態度】【患者の状態に合わせた援助方法を共に考える態度】を挙げている。また、秋庭ら²⁾は、学生のレポートを分析から、基礎看護学実習で形成される看護観として、【対象理解の必要性】【状態に合わせた援助の必要性】【看護過程の重要性】【援助者としての気づき】【観察の重要性】を抽出している。両者の各カテゴリーに含まれる内容をみると、優しさ、ナイチンゲール、安楽、不安、見守る、目標、計画立案、信頼関係、知識、観察など今回の調査の反応語に一致するキーワードが多く挙げられている。A大学基礎看護学実習Ⅱにおいても反応語から見る限り、看護過程の展開という学習が生み出す効果が順当に表れていると考えられる。

3) その他に含まれる反応語

「その他」では『主体的』『楽しい』など積極的な肯定的な反応語がある一方で、『疲れる』『やりたくない』『焦り』といった否定的な反応語が表現された。これは学生の素直な感想とも受け止められるが、自分の適性を考えた結果に基づく反応語とも解されるので、否定的な反応語について考えてみたい。

実習開始前は『向いていない』『やめたい』『逃げたい』、実習終了後は『楽しくない』『やりたくない』『やめたい』『つまらない』など出現頻度は少ないが、否定的な反応語がみられる。これらの反応語は基礎看護学実習Ⅰ終了後には見られなかった反応語である。修了した看護の専門科目も増え、看護について学習が進み、看護を提供するには多くの知識と技術が必要だと実感したことや、前回とは異なり自分が主体で患者を受け持ち、看護過程を展開することに対する不安、実際に実習を体験しての素直な感情である。

しかし、実習終了後の否定的な反応語は、実際に患者を受け持ち、看護過程を展開してみた結果、自己の適性についても考えざるを得なかった結果であると解される。

白鳥は¹⁵⁾、看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスを探求しているが、その中で「特に看護の『消極的選択』をした対象者は絶えず【迷い・惑い】を抱いており、看護に魅力を体験しても【迷い・惑い】

を完全に拭うことはできなかった」と職業価値を見いだせない者の専門職社会化が困難であることを指摘している。また、「看護の『消極的選択』をした学生は、どんなに素晴らしい体験をしても職業的価値を内在化できなければ、社会化は達成できない。逆に、看護に高い職業価値を見出している学生は、多少の困難に負けず、看護職へと傾倒できる」と述べている。ここでいう『消極的選択』とは、他の職業をめざしていたが学力などの都合により断念した場合、親などの他者の勧めで何となく看護を選択した場合が該当する。

「学生は患者との関わりから得られる肯定的なフィードバックによって看護により動機づけされる。また、自分の不足を認識する体験からは、それを振り返り看護に重要な視点を感じ取り、不足を補えるよう努力することで自分を高めようとする」⁹⁾。これにより、学生は職業価値を内在化すると考えられている。通常の学生においてはこの過程が自然に行われるが、『消極的選択』をした学生においては円滑に行われにくく、教育側の意識的介入が必要とされる。肯定的なフィードバックを得られる体験が出来るよう学習環境を整える必要がある。

2. 基礎看護学実習Ⅰ終了後との対比

表1、表2には参考として1年次後期に実施された基礎看護学実習Ⅰ終了後の反応語を併記した。これを見ると、基礎看護学実習Ⅰ終了後の反応語と比べ、基礎看護学実習Ⅱ開始前、終了後ともに「看護〈チーム〉」についての反応語が少ない。基礎看護学実習Ⅰでは、病院や他職種の役割を知り、看護職の役割を知るといふ、他職種に目が向けられる実習目標が掲げられ、学生の関心やイメージ形成に結びやすかった。しかし、基礎看護学実習Ⅱの目的は看護過程の展開という個人の患者に対する自己の看護に焦点を当てられており、専門職連携を含めたチームを意識する体験が少なかったためと考えられる。

基礎看護学実習Ⅱにおいて『信頼関係』『観察』『観察力』『コミュニケーション』などの反応語が多くなり、新たに、『個別性』『見守る・見守り』『寄りそう』『QOL』『患者主体』『患者さんのため』『患者さん優先』『向き合う』など反応語が出現している。

この新たに加わった、『個別性』『見守る・見守り』『寄りそう』『QOL』『患者主体』『患者さんのため』『患者さん優先』『向き合う』といった反応語は、患者を主語や目的とした具体的な学生の行為を含んだものである。学生たちは、自分の受け持ち患者を持ち、ケアするという

体験を通して、これまで『信頼関係』『観察』『コミュニケーション』など大きな概念で捉えてきたイメージを、より具体的なイメージとして捉えられたと推察される。

また、筆者ら^{16) 17)}が行った卒業時学生の看護観の調査では、【患者の思いにより添う】【患者のために自分を磨く】【患者を尊重する】【QOLをサポートする】【患者から信頼される】【多くの人々の健康をサポートする】が看護観として抽出された。基礎看護学実習Ⅱ終了後増加、あるいは新たに出現した反応語は、4年次生が抱く、患者に関心に向け、患者を主体とした看護に通じるものであり、学生の看護イメージが看護観に近いワードになってきたといえ、これは価値に内在化が進んだ結果と介される。

イメージの具体化、内在化のプロセスについては、今後さらに分析を加えて明らかにしていかなければならない。

3. 基礎看護学実習Ⅱの目標達成の視点からの評価と今後の課題

前述したように、今回の反応語からは、患者の看護過程を展開することによって得られる学習の成果はあったと評価できる。アセスメントについては、『患者』『個別性』『観察』『信頼関係』などの反応語に代表されるアセスメントに必要な反応語が多く、学生によってあげられた。また、計画については、『看護計画』『根拠』など「看護〈状況把握〉」や「看護〈行為の結果〉」の 카테고リーに配置される反応語が増加している点から、学生に重要性が認識されたと考えられる。

看護過程については、特に「看護〈行為〉」の 카테고リーに配置される反応語が増加し、しかも、患者の心に配慮する反応語が増加したことから、実践部分に関心が大いことがうかがわれる。また、前述したように「看護〈行為の結果〉」の反応語が増加していることから、結果を考慮した看護が提供されたと予測され、一連の過程としての看護過程が意識されたと考えられる。

しかし、この結果は全体としての傾向をとらえたものであり、学生一人一人をとらえたものではない。すべての学生が必要なカテゴリーに反応したかについては、今後さらに分析を重ねる必要がある。

4. 今後の教育に向けて

今回の結果で否定的な反応語を挙げた学生が存在したことは、看護の適性について【迷い・惑い】を感じている学生が、少数ではあるが存在することを示している。このような学生に対しては、看護の楽しさを実感でき、

看護という職業にやりがいを見出し、職業価値を内在化する体験が提供できるよう実習内容や指導を検討する必要がある。

看護に対する学生の認識の変化について、各時期を切り取って報告されたものはあるが、4年間の学習経過を追って、継続して報告している文献は見当たらなかった。このため継続して変化をとらえる試みを続けていく必要性を再認識した。

VI. 結論

基礎看護学実習Ⅱ前後の学生の看護イメージは、総反応語数においては大きな変化はなかったが、カテゴリー別反応語とその内容においては変化が確認された。

実習後では、「看護〈行為〉」「人間」「看護〈状況把握〉」「看護〈行為の結果〉」「看護〈チーム〉」の 카테고リーの割合が増加し、特に「看護〈状況把握〉」「看護〈行為の結果〉」の増加が顕著であった。増加した反応語の傾向から、患者の情報を収集し、アセスメント、看護目標設定、具体的計画立案、実施評価するという看護過程の経験が意識化され、その結果、反応語の増加がもたらされたと考えられた。

しかし、看護に対して「楽しくない」「やめたい」など否定的な反応語を挙げる学生も存在し、職業社会化の観点から、やりがいや看護を動機付ける体験を工夫する必要性が示唆された。

文献

- 1) 白鳥さつき. 看護学生の職業社会化に関する研究. 山梨医大紀要. 19. 25-30. 2002
- 2) 秋庭由佳. 藤澤珠織. 松島正起他. 基礎看護学実習で規制される看護観—レポートの分析を通して—. 青森中央短期大学紀要. 67-74. 2013
- 3) 和泉春美. 山下満子. 学生の看護観の育ちと指導上の課題(第1報)—基礎看護実習前後のレポート分析から—. 京都市立看護短期大学紀要. (28). 71-79. 2003
- 4) 中島正世. 市川茂子. 吉川奈緒美他. 看護学生の「看護」のとらえ方—基礎看護学実習Ⅰ終了後の課題レポートの使用後分析—. 横浜創英短期大学紀要. (6). 89-95. 2010
- 5) 富田幸江. 小林たつ子. 寺田あゆみ. 基礎看護学臨床実習Ⅰで捉えた看護学生の看護観に関する検討—看護観レポートからの分析—. 山梨県立看護大学短期大学部紀要. 9 (1). 61-73. 2003

- 6) 尾上とし子, 大西潤子, 斉藤頼香, 「選択実習」の学びから得られた看護観育成に関する評価と課題, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, (15), 45 - 51, 2002
- 7) 相原ひろみ, 酒井淳子, 徳永なみじ他, 看護系大学生の看護に関する認識の変化—第一報入学初期における学生の看護に関するとらえ方—, 愛媛県立医療技術大学紀要, 1 (1), 73-79, 2004
- 8) 関谷由香里, 和田由香里, 青木光子他, 看護学生の「看護」に対する認識の変化 (第2報), 愛媛県立医療技術大学紀要, 3 (1), 51-58, 2006
- 9) 辻慶子, 連想法調査による獲得された看護概念の広がり の表現, 北海道文教大学研究紀要, (34), 113-121, 2010
- 10) 長谷川真美, 今川詢子, 兼宗美幸他, 看護学生の看護観と教育的支援に関する研究, 日本看護学教育学会第16回学術集会講演集164, 2006
- 11) 長谷川真美, 村上弘之, 菅沼澄江他, 「看護覚え書」を用いた初学者の看護観育成のための教育方法の検討, 東都医療大学紀要, 3(1), 12-20, 2013
- 12) 長谷川真美, 鶴田晴美, 中村昌子, 熊谷玲子, 看護基礎教育における看護観形成に関する研究—基礎看護実習 I 前後のイメージ変化, 東都医療大学紀要, 4 (1) 55-63, 2014
- 13) 糸山景大, 授業の科学, 東京書籍, 2011
- 14) 河相てる美, 一ノ山隆司, 若瀬淳子他, 基礎看護学実習 II における看護過程を展開した学生の学びの特徴, 共創福祉, 6 (1), 47-52, 2011
- 15) 白鳥さつき, 看護大学生が看護職を自己の職業と決定するまでのプロセスの構造, 日本看護研究学会雑誌, 32 (1), 133-123, 2009
- 16) 柿沼直美, 長谷川真美, 今川詢子, ヒューマンケア学部学生の卒業時の看護観, 日本看護研究学会雑誌, 37 (3), 261, 2014
- 17) 長谷川真美, 柿沼直美, 今川詢子, 看護大学生の看護観を育む学び—看護観のきっかけとなった出来事 の分析から—, 日本看護研究学会雑誌, 37 (3), 260, 2014

受理日：2015年1月26日